岩手県遠野市の震災ボランティア

島田充啓

GW 明けの一週間、岩手県の遠野社協と被災地支援団体で形成される「まごころネット」に参加し、おもに沿岸部の大槌町でボランティアをしてきました。

作業内容は、被災者から集められたニーズを基に、床下に残った泥の掻き出し、道端に積もったヘドロの土嚢詰めなどの力仕事から、足湯、清掃、写真やアルバムの洗浄など、様々なものがありました。10時頃から作業開始で、休憩を挟んで 3時くらいに作業は終了します。実質作業は 4時間程ですが、消毒のために撒く石灰や、ヘドロの粉塵が舞っていることの衛生環境の悪さと、慣れない特異な状況での緊張や気疲れで、想像以上の疲労でした。また、雨や強風で中止になることもあるため、なかなか作業は捗りません。

床下の泥出しは、10人程度が一つのグループになり作業しますが、1日1軒終えるのが限度でしたので、東北3県の 17万6千もの建物被害を考えると、この作業だけでも長期間になります。

足湯は、心身のリラックスとストレス解消を目的としています。温かくしたお湯に足をつけてもらい、ボランティアが手や肩などのマッサージをします。その中で、避難所内ではあまりできない 1対1の会話や、知らない人になら話せるぼやきのようなものを吐き出してもらうことができます。

その際に、ひどく足のむくんだ60代のおじさんが、建物の屋上から見た津波の様子や、翌日避難所に行く途中、死体の脇を念仏を唱えながら歩いたことを聞かせてくれました。それが今も脳裏をよぎり、外を見たり、歩いたりすることが億劫になっているそうです。

今は眠れているし、食べられていると言っていましたが、精神面での本格的なサポートがまだまだ足りないと強く感じました。

現場では、滞在日数が長いボランティアがリーダーとなり、ボランティアの自発性が重視されていました。

「ボランティアはしてあげるのではなくさせてもらう」という理念が一人一人の活動の軸になっているようでした。その結果、「こんなに綺麗になるんだったら、うちも手伝って」という声が拡がり始めていました。被災の度合いは一人一人違いますので、これからより段階的で幅広い個別的なケアも求められてくるはずです。

現地に行き、何をするにも人の力だということを痛感してきました。被災された方の自立生活にむかうサポートを、多くの方々と一緒に考え、できることを継続的に取り組んでいきたいと思います。